

2024年4月7日前晩
復活節第2主日
菊地功大司教 メッセージ

ヨハネ福音は、主が復活された日の夕刻、まだ何が起こったかを理解していない弟子たちが、恐れの中に隠れてしまっている様子を伝えています。もちろん自分たちのリーダーを殺害した人々の興奮への恐れもあったでしょうし、同時に、見事にイエスを裏切り見捨ててしまったことへの自責の念もあったことでしょう。

その弟子たちの真ん中に現れたイエスは、弟子たちの心の闇を打ち払うように、平和を告げます。平和は神が定められた秩序が完全に存在する状態です。神との完全な交わりの中にある状態です。すなわちここで、イエスは神がいつくしみそのものであり、常に神との完全な交わりへと招き続け、見捨てることはないことを明白に示します。神のいつくしみに完全に包み込まれていることを知ったとき、弟子たちの心の暗闇は打ち払われました。

復活節第二主日は、「神のいつくしみの主日」です。1980年に発表された回勅「いつくしみ深い神」に、教皇ヨハネ・パウロ二世は、「(神の) 愛を信じるとは、いつくしみを信じることです。いつくしみは愛になくってはならない広がりの中であって、いわば愛の別名です」(7)と断言されています。

教皇フランシスコは、2015年12月8日から一年間を、「いつくしみの特別聖年」と定められ、神のいつくしみについてあらためて黙想し、それを実行に移すようにと招かれました。

その特別聖年の大勅書「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」には、「教会には、神のいつくしみを告げ知らせる使命があります。いつくしみは福音の脈打つ心臓であって、教会がすべての人の心と知性に届けなければならないものです。・・・したがって教会のあるところでは、御父のいつくしみを現さなければなりません」(12)と記されていました。

わたしたちはいま、世界の各地で、いのちの危機に直面し、暗闇の中で恐れに打ち震えています。どこへ向かって歩を進めれば良いのか分からずに、混乱した世界で生きています。そのわたしたちに、常に共にいてくださる主イエスは、わたしたちの直中に立ち、「あなた方に平和があるように」と告げながら、わたしたちをそのいつくしみに包み込もうとされています。復活された主は、わたしたちの具体的な愛の行動を通じて、世界に向かって平和と希望を告げしらせようとしています。「教会には、神のいつくしみを告げ知らせる使命が」あります。

不安に打ち震える社会の中で教会が希望の光となるためには、キリストの体である教会共同体を形作っているわたしたち一人ひとりが、いつくしみに満ちあふれた存在となる努力をしなければなりません。

明日4月8日から13日まで、日本の司教団は全員で、アドリミナの訪問のためにローマを訪れています。アドリミナとは、世界中の司教団が、定期的に聖座を訪問し、ペトロの後継者である教皇様に謁見して教会の現勢について報告をし、聖座の各省庁を訪問して情報交換するために行われます。さらには教会の礎を築いた二人の偉大な使徒、聖ペトロと聖パウロの墓前でミサを捧げ、サンタマリアマジョーレとラテランの両大聖堂にも巡礼します。前回は2015年でした。ローマを訪問している日本の司教団のために、また教皇様のために、お祈りください。